

第4次葛飾区地域福祉活動計画 第3回策定委員会 議事要旨

開催日時	令和3年10月29日（金）午後2時00分～4時00分
開催場所	ウェルピアかつしか 1階 活動室
出席委員	河合委員長、小野副委員長、谷澤委員、佐藤委員、浅野委員、津村委員、三尾委員、根岸委員、根本委員、矢頭委員、細谷委員、河原塚委員、新井委員、倉谷委員、風間委員、小林委員、大山委員、久野委員
配布資料	【資料】第4次葛飾区地域福祉活動計画（素案）

■ 議事

1. 開会

2. 新任委員紹介

事務局より、新任委員（町連）の紹介があった。

3. 議事

（1）第4次葛飾区地域福祉活動計画（素案）について

委員長

第3回第4次葛飾区地域福祉活動計画策定委員会を開会したい。本日は事前送付した計画の素案に基づいてご議論いただきたい。

なお、活動計画素案の資料編（82ページ～84ページ）に、計画策定のために社協が行ってきた3つの調査、既にご報告してある地域福祉活動アンケート調査、小地域福祉活動ヒアリング調査、社会福祉法人に対して地域公益活動アンケート調査の結果を載せてある。前回の委員会では、この調査の概要をお示ししてご意見もいただいて修正も加えた。今回は、この報告に調査結果のクロス表を入れようとしたが、事務局と打ち合わせて本日お配りすることはやめた。本来ならばここに調査報告書の案もお示ししたかったが、統計的な分析の詰めが甘い調査票があったので、私の意見として急遽止めさせていただいた。この委員会はあと1回のみで、そこで調査報告書の意見をいただくのでは遅いので、調査報告書はできるだけ早く皆さん方に郵送でお届けしてご意見をいただきたい。その点をご理解いただきたい。

まずは事務局から資料の説明をお願いしたい。

事務局より資料の説明を行った。

委員長

事務局から素案の説明をいただいた。計画そのものは全体にわたって細かく書かれているが、この計画を推進する際に優先的に実現しようという姿勢を示す意味で重点項目を掲げている。皆さんからご意

見をいただきたい。

副委員長

作業委員会で一番議論が多くなったのは47ページの「居場所づくり事業」だ。これについて、地域で小地域福祉活動をやっている方々、NPOの方々から、この事業はとても魅力的であり大切だと。拠点を選んだ中で地域の方々とともに地域の課題を解決していく。そのための拠点、みんなが集まれる場所が欲しい。これを全地区で広げていけないものかというところがみんなの期待だ。しかし、実際に議論してみるとその活動をどうしていくのか、誰が運営するのか、細かくは何時から何時までなのかというところまで課題になった。何をしていくのかはその地域の中で決めていくことだが、そのときにどんな課題があってどのように進めたらいいのか、そのための道しるべになるようなものを今回つくりたいだろうか。これは東金町地区でやるという話だが、モデル地区というかたちで進めることが望ましい。その中で社会福祉協議会としてもバックアップしてもらいながら、その活動を進められないのか。それが1つの到達点だと考えられる。

もう1つの大きな議論は、この計画にはいろいろと書かれているけれども、いつまでにどのように行うかを明確にしてもらいたい。これは最後のページにも書かれているが、やはり何年までにどのように達成するかをきちんと入れていく必要があるということで、事務局の方に今回到達目標を詳しく計画の中に書いていただいた。以上、居場所づくり事業と計画の推進体制について作業委員会では議論があった。

委員長

居場所づくり事業について具体的に説明してほしい。

事務局

東金町にある一軒家、民家で今まで区が所有していた建物だ。もともと障がい者のグループホームとして使っていたが、使わなくなったので、どこか使うところはないかという声があった。そこで私たちもできれば拠点を一つ設けて、さまざまな地域の方々がお互いに支えあい助け合えるような活動を展開する場所が欲しかったということがあって、手を挙げて居場所づくり事業をやりたいと話したところ、使っていていいという返事をいただいた。社協としては、近隣の方々に引きこもりなどのいろいろな課題を抱えている方もいらっしゃると思うので、そういう方々が気軽に立ち寄れて、お茶を飲んでおしゃべりができて、自分の居場所が見つけれられるような場所にしていきたいと考えて、このようなかたちで提案をさせていただいた。今は建物の内部改修工事をしており、11月半ばぐらいに終了する。改修工事が終わり次第、地域の方々からご意見をいただきながら、居場所づくりについては進めていきたい。

高齢者から子どもたちまでさまざまな方々を対象にして、地域の方々、ボランティア、NPOといった方々の強みを生かした活動がここで展開できればよいと考えている。作業委員会や地元の役員会では、地域の方々の地域活動の拠点だろうということで地域の方々から意見を聞きながら進めてくれという意見が多く出ていた。そのため、この居場所づくり事業の実施にあたっては、あきみつ寮の運営委員会を設けて、そこでどういう活動をするのか、どういう活動が必要とされているのか、どういう活動を展開したらいいのか、その募集方法はどうしたらよいかということ聞きながら、丁寧に進めていきたい。

委員長

土地、建物は区の所有で、それを借りて今、改修をしている。まずはモデル地区として1箇所ですタートさせるということで、事務局としてはほかに広げていくことは考えているのか。

事務局

この計画書の67ページ「地域の居場所とは？」の④と⑤に今後の方向性等について書いてある。当面はこの居場所でさまざまな活動を協力いただきながら展開していきたいと考えている。モデル的に実施して、活動を展開する中でその運営方法や経費について検証していきたい。こういう民家を借りることは難しいと思うけれど、空き家があるから使って何かをやりたいというときには、ここで検証した結果を踏まえて要望のある地域で新たな居場所づくりを展開していきたいと考えている。また、民家だけでなく都営住宅や公団の集会所でやりたいという話があれば、社協のほうでその地域の方々の居場所づくりを支援していくという感じでやっていきたい。

委員長

居場所には当事者の方、支える側の方、社協として専門家もいる。こういうかたちで一定地域の施設で活動をやる場合、そこになかなか来ない人、潜在化している課題などを社協としてどう把握するのか。活動をやりつつ専門家として、その地域で声を上げない人の問題をどう考えるのか。専門家としてどういう地域戦略を組むかということが重要だと考えるが、それは事務局あるいは作業委員会レベルではどのような議論があったのか。

事務局

先ほどもお話ししたとおり、まず地域の中でどういう困っている方がいるのか、どういう活動が求められているのか、それに対してどういう活動があったら今後住みやすくなるのか。そこは地域の方々のご意見を伺いながら、それを踏まえて活動を考えて募集はしていきたい。運営委員会を設けてその場で話し合いをしながら活動を進めていく予定だ。当面は専門職というよりも、地域で実際に暮らしている方、町会の方々、民生委員の方々、地域の社会福祉法人にも入ってもらって、その中で検討なり調査なりをしていきたい。

委員長

地域のサロン活動は全国にたくさんあって歴史もある。一定地域にあってそこにたまたま来ている人たちの交流というレベルのものから、かなり地域を見渡して戦略を持ってやっているサロンもある。今までのサロン活動とは違う専門的なアプローチも入れつつ、葛飾区社協がどういう戦略を組むかというのは大切だと思う。

事務局

あきみつ寮で展開する活動はお話ししたとおり、地域の団体、町会や民生委員、NPO、ボランティアとか専門性の強いところにも入っていただいて、さまざまな課題解決の取り組みをやっていきたいと思っている。突き詰めていくと、家に閉じこもりがちな方々、あるいは生活課題を抱えている方々、そういう方々の生活が少しでも改善される、良くなるようなところを目指していきたい。

委員長

地域活動の領域は障がい者、高齢者とか、いろいろあるが、それをどう選ぶのか。今の生活困窮者というのはかなり大きな話だ。引きこもりといっても多様な背景がある。それをやるというのはどうするのか。

事務局

そこまでできればいいということで、そこは地域の方々、実際に運営に協力してくれる方々の意見を聞きながら進めていくことになる。

委員

まだ現場を見ていない。場所はだいたい聞いているので、この間探したが、わからなかった。ちょっと狭い、場所的には目立たないところだ。私としてはまだ漠然としている感じだ。委員会をこれから立ち上げるとは聞いているが、居場所づくりというと15、6年前に私が主任児童委員をやっているときに、たしか居場所づくりという話があって、思い出すのは新小岩でそういう場所が立ち上がるということだった。居場所づくりだから居場所がない方を受け入れる。極端な話、ホームレスの方でも受け入れるのか。うちの小地域福祉活動では囲碁、マージャンをやろうという意見があって、そこを使わせてもらおうという話は出ている。

委員

居場所づくりというのは、今やっている小地域福祉活動の場所ができたと思われてしまう。結局サロン活動や小地域福祉活動で利用する。それは居場所づくりというか、小地域福祉活動の延長みたいなかたちでちょっと違うのではないか。方法はわからないけれども、その場所ができていて活用ができればいいと思う。地元の方々に運営委員会をこれから開くということだから、小地域福祉活動やサロン活動とは違うものができればいいと思っている。

委員

これは本当に漠然としていて、いろいろなことが羅列されていて難しいところがある。地域の人たちを巻き込んでやるということは、その地域が抱えていてみんなが集まれるような問題を提起して、一つの核となるような事業を入れたらいいのではないか。私は災害をやっているが、災害は各地域に住んでいる人、障がいがある人、健常者、病気の人、みんな同じように降り掛かってくる。災害のときには最初全員に対して物事が起こっている。あなた方はそれに対してどうしようと考えているかというテーマを与えて考えてもらい、地域として取り組まなければ可能性があるかどうか議論されていくことが望ましい。今はコロナ禍で全くできないけれど、避難所とか訓練を主体としてそれぞれが抱えている具体的な問題点を与えて、その中で核になるようなものをつくる。そこから発生させていくようにしていかないと、地域全体というのはなかなか難しい。

こういう項目はNPO団体などいろいろなところがそれぞれの問題点を抱えて、それに理解のある人たちはそれで動いているけれど、地域全体で全く新しい人たちを巻き込むというのは、その人たちに具体的なプランを提案していくことが必要だ。そのためには区の行政との協力関係を社協である程度つかんで、その地域ではどういったちで訓練をしたらいいのか、自分たちが考えていることはどういったことか、どういった準備が必要か。そういうところで講師派遣をお膳立てすることが社協としてやることかと思う。これを全体に対してやっていくことは難しく、各年齢層に対して、例えば高齢者用、子ども用の対策などと分けていかなければいけない。そこで一つのつながるような内容、災害を例に出したけれども、その地域の問題点が出てくると思うので、町会とかで提起してそれに対してどう思うかを聞いてみるような体制。それから、町会だけではなくて中学・高校のPTAも巻き込んでいかないと、こういう活動はうまくいかないと思う。これを実行するための方策としてもっと具体的なものを示さないと、

誰も付いてこない。付いてくるようにするためには、そういうものをつくってあげないと駄目ではないか。
委員

67 ページの「居場所」、1つの場所があって、そこにいつでも誰でも来てください、好きなことをやってくださいというのでは、委員が言ったように誰も来ない。何曜日はこういうことをする、何曜日はこういう方がこういうことをするというように目的をはっきりさせないと、誰も来ないと思う。誰でも立ち寄ることができる居場所はもちろん重要だけれど、この誰でもというのは障がいなら障がい、高齢なら高齢の人が誰でもということにする。こういう居場所づくりで一番問題になるのは、やはり運営主体だ。誰かが主導してこういうかたちをやろうとしないと、来る人がみんな好きなことをやるでは、声の大きい人が引っ張って行って自分の好きな人を集めて、みんなが来られない状況になるのが目に見えていると思っている。

委員

居場所づくりというのは先ほど委員が言ったように、やはり何か目標を持って、行って自分が気持ちいい、心地いい、もう一度行ってみたいというかたちのものがないと、なかなか集まらないのではないか。例えば私は釣りをやるので、釣りの好きな人は何曜日に来てお話ししてみませんか。ラジオ体操に参加している方、来てお話ししてみませんかとか。何か目標を持たせていかないと参加者は少ないのではないか。

私は東金町に入ってきて45年になるけれど、地元の学校を出ているわけではなくて仕事だけの付き合いで今まで来た。その間に子どもの幼稚園、小学校、中学校で少し輪ができた。非常に残念なことは町会の活動、PTAの活動、そういう活動にはあまり縁がなかった。今でも地元の人としては受け入れてもらってないのかなと思う。そういうかたちで生活してきて、今年で後期高齢者になる。仕事も一段落し会のほうの仕事も一段落した。やることがない。こういう機会があれば地元の人とお話ししてみたい、接してみたいという気持ちがあるが、なかなか機会が得られない。こういう居場所づくりはすごくいい話だと思うが、一步踏み込んで自分がそこに参加するような機会が、腰を押してもらわないとなかなか出られない。それと、自分の興味と合致しないと、こういう場所には私個人の考え方としては出たくない。だから、町会とか、さまざまな人とお付き合いが発生するような環境の方はもっと積極的に話していかないと、こういうものは絵に描いた餅に終わるのではないか。

非常に立派なことがいっぱい書いてあるけれども、私のように底辺ではいつくばっている一区民としてはなかなかわからない。興味がないというか、出ることが億劫になって、ただ引きこもってしまう。ではどうするか、何かいい手があるかと言われるとあまりないけれども、興味を持っている人と一緒にお話をできれば、もう一回行ってみたいという環境をつくれれば、すごくいいことではないかと思う。なかなか最初は大変かもしれない。

委員

水元清掃工場で冷却に使った水がお湯になったものを水元地区センターに供給して、公衆浴場というか誰でも入れる施設がある。その2階に前は食堂があって酒も出していた。うちの会にその後をやってくれないかという話が来たが、うちではとてもできないとお断りして、今はその店はやっていない。私たちもやろうと思ってあそこの噂を聞いたときに、やはりボスみたいな人がいて仕切っているとか、休憩所もここは私たちが使うところだとほかの人は使えないという状況だった。あそこはお風呂もあっていい場所だと思うので、一度あそこの実態を調べてみて、どういうかたちがよいかを検討していただきたい。

委員

今の意見を聞いて、町会の立場から言うとやはり小地域というのはその地区の協議会と解釈している。地域というどうしても大きくなってしまふ。町会単位では、うちの町会の話をするとかラオケをやったり、踊りを踊ったり、ダンスとかいろいろなことをやっている。そういう催しをやって、拡大していけば小地域も拡大していく。例えばカラオケだとカラオケ大会をやるとか、そういうふうに広げていくとだんだん大きくなっていくと思う。町会は今、役員のやり手がいなくて募集している。ちょっと飛び込んでくれるとかなり助かる。今は役員不足で、高齢になっても後任者がいない。そこをもっとPRしてもらって、一度ぐらい顔を出してもらえばかなりなじんでもらえる。そういうところでも協力してもらって、できればそういう小さいところから大きくしたい。例えば小さな町会の行事を拡大していくと、小地域の活動が大きくできるのではないかな。今、各町会の器の中でやっているものが多くて、本当の小地域の活動なのかと私個人としては疑問に感じている。これからはそういうところのやり方を変えて、ほかのところを参考にしていってやることも必要だと思う。

委員がおっしゃった避難訓練を我々もやっている。2年前の台風の際に避難勧告が出たときに、避難所が体育館で移動するのは年寄りだけでは大変だった。うちの地域の葛美中学の体育館に避難した人は若い人が一緒に付いてきて、そういう人が動いてくれてかなり助かったと聞いている。そのように動いてもらえるものをつくって皆さんで協力する体制をつくっていくことが必要だと感じている。できれば、ここにいる人だけではなくて皆さんに声を掛けて顔を出してもらいたい。そして、何かあったら町会の行事の中に飛び込んでもらう。カラオケをやっていたら参加してもらう。そういう何かの機会をつくって町会に協力してもらえると福祉も発展するのではないかなと思う。

委員

新小岩でもいろいろな活動をやっていて、その1つを居場所づくりということで紹介したい。松南小学校が昔あって今は廃校になった。そこで東京シューレとかいろいろな事業所もあるが、我々は松南の森プロジェクトを立ち上げて、この6、7年やっている。これは昔小学校だったので周りにいろいろな木がたくさん植わっていた。それをそのまま放っておいてはもったいないということで、区の援助やセブン-イレブンの補助金をいただいて再整備している。専門家の助言もいただき、葛飾区からも花の苗をいただいて事業をしている。それに老人会の方、保育園、小中学校の生徒にも来てもらって小さい子には写生をしてもらっている。お年寄り、幼稚園の子ども、学生さん、まちの普通の人もやっていて、剪定もするので非常に生産的なこともある。非常に良くなったけれども、この2年近くコロナで駄目になって雑草が茂ってしまつて来年からもう一回やり直そうとしているが、非常にいい居場所づくりではないかと我々は自負して推進している。

委員

子どもたちの関わりからすると居場所というと遊び場を考えるが、今、遊び場に関しては教育委員会では学校を開放して地域の方々に見てもらって遊び場を提供している。この居場所を見た場合に対象が子どもなのか、お年寄りなのか、遊びのグループなのか。それによって運営する方も変わってくるだろう。地区センターで会合があると思うが、もっと緩いかたちで人が集まって飲み食いしてもいいし、長寿会の方や地域防災の方、地域をきれいにする方、いろいろな方がいると思うので、そういう方が簡単に集まってワイワイガヤガヤするところから少しずつ話が広がっていくのかな。あまり固くしないで緩くやったほうが人が集まりやすいかなと思う。

委員

地元で高齢者を対象に月に数回お茶飲み会をやっているが、最近はなかなか集まらない。そこで月に1度有志が集まって、配偶者を亡くされた高齢者の方、独り暮らしの方に絵手紙をお配りしている。ご機嫌を伺いながら、たまにはお茶飲み会に出てきてくださいと誘っている。最近は本当に引きこもりが多くて、なかなか出たがらない。また、若い人からは「コロナが心配だから出るな」と言われているらしい。活動もだんだん尻つぼみになってきているので何とかしたいなと思っている。皆さんからいい案があればお聞かせ願いたい。

風員

東立石2丁目の民家でNPO法人中・西会のサテライトという位置付けで活動している。6年前から始めたが、最初は月に1度の食事会、歌う会と吹き矢を隔週やっていた。月に1回の食事会は30人ぐらの参加者があって大変だった。コロナ禍で食事会が駄目になったが、やはりつながりたいということで弁当の配達に切り替えて、月に1回60食を配達している。以前の食事会では年に2回、夏の七夕と冬のクリスマスに合わせてフラダンスとか人形劇を高齢者を対象にしてやっていた。中・西会の方の誘いもあって東四つ木の人とか新小岩の地域とか、結構広がったところから参加者がある。今は月1回の弁当配達と、土曜日に4、5名程度の独り暮らしの人に食事会をソーシャルディスタンスを取って開いている。

最近日曜日に、以前話したモルックという遊びを広めたいということで力を入れて、かわばた公園や四つ木公園とかでやっている。散歩に来ている人たちが面白そうだなと立ち止まっているので「一緒にやりませんか」と言うとうってくるし、子どもたちもテレビで見たとか寄ってきて、誘うと一緒にやっている。地域が混ざるのを感じている。町会も支援をしてくれて結構恵まれた環境でやっている。今はコロナ禍で歌う会と吹き矢は止めているけれど、もうそろそろ始めようかという話をしている。ちょっと手を広げすぎかなという話もあるが、子どもの孤食ということで食事を提供できたらという話も出ているところだ。

委員

今の話を聞いているとコンテンツはたくさんある。それがコロナで駄目になっていて、それをどう復活させていくかというところの問題。もう1つは医療的な観点から言うと、高齢者の方にとっては認知症という問題がどうしても絡んでくる。その認知症に対してやっているのはハイリスクアプローチと言って医療的にアプローチするところと、ポピュレーションアプローチという社会的な参加を促すようなことでやる。そういうコンテンツはたくさんあるのだから、それらをどういうかたちでやっているかという実態をきちんと社協が把握して、それに対してどういうかたちの支援ができるのか。あるいは、社協だけではなくて区としてその辺を高齢者対策としてどういうかたちでやっていくのか。子どもに関するいろいろな問題点として親との接点がなかなか難しくなっている。こども食堂という活動はコロナ禍でもボランティアの方々は何とかやっている。その辺の実態については全然わかっていない。どこでどういうことをやっているのかを絵的に、例えば地図で示してもらおうとか、どこにどういう参加の窓口があるのかという情報提供をやってみてもいいのではないかな。そういうものがあると、1個1個のコンテンツの中で興味があるものにみんなが参加することによって関係性ができあがって、いろいろなことができるようになる。

今、コロナでみんな家に引きこもっていたが、行きたくて行きたくてしょうがない。まさにチャンス

だと思う。そういう情報提供をできるのはやはり社協だと思う。どこでどういう活動が行われているかということ、この時代だから地図上に全部見せてしまえばいいのではないか。お年寄りがネットを見るのはなかなか難しいから、わかりやすいような、お年寄り向けのものをつくってあげなければいけない。お年寄りがどうやってコロナワクチン接種の予約を取るのかということ、非常に頭が痛かった。これもなかなか難しく、まだうまくいっていないが、たぶん3回目の接種が始まるので、これである程度コロナが抑えられる可能性が高い。3回目の接種が来年の2月ぐらいから始まるから、それが終わったところで活動を活発化させることができる。その前の段階でそういう情報を集めておいて、それを皆さんに見せられる態勢を整えておくことが今後は必要ではないか。

もう1つは災害に対して例えば講師の派遣は医師会でもできるし、咀嚼の問題でも食事会で単に集まるだけではなくて、講演に行く人を依頼していただければ歯科医師会も医師会からも喜んで人を出さるだろう。情報を提供できるツールはいろいろある。もっと簡単に言えば、コロナ予防に医師がどうかたちでしていたか、介護のときに何をするのか、そういう出前講座的なものをつくっていく。地域の中にある知識を出前講座的にやる。それと、それぞれのコンテンツ、活動されているものを全部拾い上げていく。それをうまくマッチングさせるということが社会福祉協議会に一番必要だと思う。

委員長

区としてはいかがか。

委員

幅広い議論を聞かせていただいた。私たちも地域づくり、居場所づくりについては取り組んでいるところだ。一例を申し上げますと生活支援体制事業を行っていて、7つの生活圏域ごとに協議会、区全体として協議会を進めている。また、地域包括でやっている地域ケア会議で地域ごとの個別の支援、地域の課題を考えるという取り組みもやっている。ただ、課題があっても具体的にどういことをやるかとなると具体策がなかなか見いだせないというところで進むことができないという状況だ。社協との関係で言うと、区としては、やっている取り組みの中に社協に入っただき運用を一緒に考えていただきたいという感触は持っている。特に居場所の中では、ソフト面なのかハード面なのかよくわからないところがある。ソフトづくりのほうが大切ではないかと考えると、さまざまな活動支援をしていくというところについて社協と一緒に取り組んでいただけるととてもありがたいという印象を持っている。

個別の支援、先ほど引きこもりというお話が出たが、区は今、包括的な支援体制を徐々に進めていこうと考えている。高齢者とか障がい者とか既存の支援の枠組みは決まっているが、それに当てはまらない人々を救っていく取り組みをしていく。行政の中でいろいろ連携を深めていくというところで体制をつくっていかうとしているが、行政で一時的な支援や中期的な支援をすることはできるけれども、その後をずっと引き継いでいただくのはやはり地域にお願いしていかなければならない。そこにも社協に入っただき、その支援の枠組みの中で個別支援を地域の中でどうしていくのかを一緒に考えていただきたい。

委員

地域の居場所というのは昔からサードプレイスという言い方があった。社会人であれば、自分の家と職場、それ以外の場所がいわゆる地域の居場所ではないか。子どもであれば、家と学校とその他の居場所ということで、例えば児童館あるいは図書館などがそれに当たるのではないか。

先ほどなかなか人が集まらないということをお話されていた。区内に150以上の高齢者クラブの登録が

あったかと思うが、果たして実際に活発な活動をされているところがいくつあるのかわからない。2025年になると日本の人口の4分の1が後期高齢者という超高齢社会を迎えるという2025年問題がある。それにもかかわらず、高齢者の居場所としての高齢者クラブに人が集まらないとよく言われている。それでも区は高齢者クラブに対して助成をしようと言っている。

私のところの高齢者クラブは人が全然集まらないので、実は休会してしまった。ところが、その隣の高齢者クラブは最近できて2周年を迎えるが、100名以上が集まって、40名が集まるというサロンがある。私はその2周年の行事で講演を頼まれていて打ち合わせをして、その資料を全部見せてもらった。実際に行ってどのような活動をやっているのかを見るつもりだ。かなり細かくいろいろなことをやっている。要するにトップに立つ人の器量かなと思った。その人の人的魅力で人が集まるのではないかと感じた。やはり高齢者クラブはいろいろなことをやらなければいけないので大変で嫌になってしまう。趣味の会だったら自分の好きなことだけをやっていればいいので、それで人が集まるのかと思ったが、それでは地域の居場所にはならない。来週はそこに講演に行くが、終わった後もどうしているのかを参考のために見せてほしいと言っている。どのように運営するかを今後の参考にしたいと思っている。

社協の立場から言うと、ここに書いてあるように年齢や属性にかかわらず誰もが立ち寄る居場所があるということでは、これはどういう居場所なのか、どういう人が集まるのかわからない。だからこそモデル事業として手探りの中でいろいろ考えて、一つの方策を考えていくのかなと感じている。社協が考える居場所というのはいろいろな人に集まってもらいたい。子ども、高齢者、そういう人たちをどうやって受け入れていくのかをこれから考えていくためのモデル事業だと私は捉えている。

特に委員がおっしゃったようにコロナ禍で居場所がなくなってしまった人がいることは間違いない。コロナ禍でいろいろな地域の問題が出てきている。1つは引きこもりの高齢者、どこにも出ていかない、誰ともしゃべらないとフレイルが進むのではないかと心配されている。逆に、オンラインが進んで在宅勤務が増えたために奥さんが邪魔にされて、家にいられないということで公園で遊んでいる人もいる。そういう人たちをどのようなかたちで取り込んでいくのかもコロナ禍の新たな問題として社協が考えていかなければいけないと考えている。

委員長

全体的には今日は時間の関係で議論できなかったが、重点項目の地域の居場所についていろいろな意見をいただいた。先ほど社協としてはこれから模索して考えるだろうという意見が出たが、今日の議論で言うと詰めが甘いのではないかと。1つの側面としては、例えば引きこもっている方をその施設に引き出してくるという戦略を分野ごとに相当絞って組まないと、なかなか引きこもっているところからその地域に引き出すのは難しいという話もあった。当事者そのものをこの居場所につなげるという戦略も、やってみてということがあらゆる分野に入っている。そうではなくて、この策定委員会は来年までであるのもう少し詰める必要があるのではないかと考えた。何でもできるわけではない。一つだけでも非常に大変だと思う。認知症でも、障がい者でもそうだし、子どもの問題もそうで、もう少し詰める必要があるというのは今日のご意見だった。

もう1つ、委員がおっしゃっていたことで、地域の課題で住民がみんなで解決しようというものをはっきりさせて、地域の住民をもっと広く巻き込んでいく。そういう努力も必要だ。当事者そのものを少人数の心ある人たちのボランティアで支えるというだけではなくて、もっと大きく地域を見て課題を明らかにして住民を巻き込んでいくという戦略も必要だと思う。もともと1800年代にイギリスで慈善組織協会がスタートしたのはそういうことだ。地域にある課題を丸ごと捉えて優先順位をつけて、その重要

な課題を行政も巻き込んでみんなで解決しようというかたちで地域組織化が発達して、それが社会福祉協議会につながっている。もう少し地域全体の課題というか、住民が共有できる、納得して一緒にやろうというチャンネルも必要な気がする。委員が提起されたことは社協の課題でもある。当事者ばかりを見ているのではなくて、丸ごと地域の住民を変えていくというか、一緒にやっていく。それがまさに地域組織化の理論であり、そういう視点も考えて、このままではうまくいかないことははっきりしているみたいなことまで言われているわけで、この居場所についてももう少し戦略を詰めていただければと思う。

事務局

特に居場所づくり事業については作業委員会でも活発な意見をいただき、皆さんからアドバイスをいただいた。対象をどこに置いたらいいか。それをわかりやすくするのが一番だと思うけれど、社協としてはいろいろな方をターゲットにしたさまざまな取り組みをまずはやってみたいと思っている。特に地元の役員会でも、また作業委員会でも、社協としての考えを押し付けるのではなく、地元として地域の方々がどういうことをやりたいのかを第一に考えるということを強くいただいたので、地域の方々の意見を聞きながら取り組みについてはいろいろと考えていきたいと思っている。社協としては、誰でも立ち寄れる、お茶を飲んでおしゃべりができるスペースを基本としつつ、いろいろな団体から協力をいただきながら、健康体操、こども食堂、障がい者に対する相談事業などのさまざまなメニューをやってみたい。今日もお話があったが、居場所の関係では主（ぬし）みたいな人が出てくる。敬老館にしてもそうで、そういう人がいること自体はもちろん悪いことではないとは思いますが、そういう方々にも配慮しつつ運営には気を付けていきたい。委員からお話があったとおり、なるべくガチガチにはせず、これだといきなり縛るのではなく、本当に柔軟に緩く地元の方々の意見を尊重しながら運営はしていきたいと思っている。

あと、先ほど委員からも地域全体でどんな資源があるのか、それが一目でわかるようなものがあるという意見をいただいた。本当にそのとおりで、この計画の中でも地域関係者のネットワークづくりに少しずつ取り組んでいきたい。地域の福祉関係者、あるいは医療や介護の方々と情報交換、情報共有する中で、その一つの取り組みとして地域にどういう資源があるのか、それが一目でわかるような取り組みも考えていきたい。この5年間でネットワークづくりについてはさらに一歩踏み出していきたいと思っている。

委員

社協が主体となって住民に対して何か示せるようなものも考えていただかないといけない。それは住民に寄り添ってみんなの言うことを聞いているだけでは絶対にまとまらない。このテーマだけは全共通的なテーマだというものを社協で考えて、具体的に言うと一番やりやすいのは災害、そういうテーマを与えて、それに対してどういうふうに対応するかというアプローチの仕方をする。具体性をもってそういうものを示していく。例えば認知症はやはり個人の問題で、全体の中で問題が起こったときにどうするかということを考えてもらう仕組みを一個だけ提案する。たくさんは要らない、一個だけでいい。社協主体で何かもの考えることも必要だと思う。

委員

事務局から、社協から押し付けないということを言った。小地域福祉活動を始めて10年になるが、最初に立ち上げたときには地域の方々からなんで押し付けるのかという反発を食らった。その経験が今の事務局の発言につながったかと思う。やはり地域から熟成するのを待つことも大事だ。地域の中からあ

る程度熟成してきて、自分たちで何かやるというところまで持っていくところまでが社協の仕事ではないかと思っている。そうすれば、あとは事務局としてフォローするだけになる。そこまで持っていくのも大変なのかと思っている。委員が今おっしゃったように、一つのテーマというのが大切なのではないか。小地域福祉活動でもそうで、例えばどこに行っても、出ているチラシ、のぼりを見て、これは小地域福祉活動だ、うちでやっていることをここではこういうふうに行っているんだということがわかるようにしていかないと駄目だと思う。そういった一貫性のあるものをテーマとしてこれから考えていかなければいけないと思っている。地域の居場所づくりは大変だと思うけれど、事務局には頑張ってほしい。

委員長

ほかの重点項目についてはどうか。

委員

社協のホームページを見ると、こんなものがあるんだという感じで、あれだけ皆さんが力を合わせてつくられたと思う。あんないいものがある。こういうものも必要で、文書になって大変なものだと思う。しかし、今は手元にスマホがあり、SNSとかいっぱいある。お店を探すにしても、若い人は店名を入れて、どういうものがおいしいのかを見定めてどのぐらいの距離にあるのかもスマホで全部、事前に情報を収集している。それと同じく、若い人、ある程度年を召した方、障がいを持っている人、さまざまな人に情報として、ああいう媒体をもっとうまく、すぐに手に入るように情報提供ができれば、もっと内容を皆さんに知らしめることができるのではないかと。お金をかけてこういうものをいっぱい作るよりも、ああいうたぐいのものを小さくてもいいから、たくさん出していく。ぜひそういう媒体も忘れないで事務局から出してほしい。

委員長

ボランティアセンターではそういう発信をしているのか。

事務局

フェイスブック、SNSを活用しながら、講座の結果、アンケート結果を発信している。あと、45ページにボランティアセンターの重点事業が載っている。第2回策定員会で委員から、ボランティアイコール福祉と捉えるのではなくて、地域活動として広く面で見たらどうかという意見をいただいた。事務局で検討した結果、「ボランティア・地域活動講座」で人づくり、または地域づくりに役立つようなかたちでやっていきたいと考えている。「ボランティアや福祉の枠にとらわれず、暮らしに役立つ内容や地域のニーズに触れる体験などの講座を開催し、地域での活動参加につながるきっかけをつくりたい」ということで、地域やまちへの愛着を育むような参加型のプログラムをこれから考えて、委員の皆さんや関係機関のお力をお借りして、私たちはアウトリーチというか外に出向いていく、皆さんと一緒に地域づくりやボランティア・NPO活動支援など取り組んでいきたい。

委員長

福祉の枠を超えていろいろな地域の課題に関心を持つ、そういう区民をどうつくるかというのは非常に重要な課題だ。葛飾区社協はその辺がまだ弱いところで、区も含めてもっと区民を育てる。いろいろなことに関心を持って動いていく区民をどうつくるのか。そういうことは大切だと思うので頑張っていただきたい。

今日は貴重なご意見をいただいて、それを次の議論につなげていただきたい。

副委員長

先ほど委員が「踏み込む」という言葉を言われた。今ヒアリングなどでいろいろな話を聞いていくと、葛飾区も喫緊な課題がたくさんあるとひしひしと感じた。そのときに我々というか社協の方々も含めて踏み込まないと済まないという時期に来ているのではないかと。区民の方々が踏み込むためには、我々専門職も含めて踏み込むことが必要ではないかと。その人たちに踏み込んでもらうための我々の踏み込みが今必要だと感じている。今回いろいろな宿題が出されたので、その宿題を含めて考えていきたい。

事務局

本日欠席の委員からお預かりした伝言を紹介させていただきたい。「今でこそ小地域福祉活動という言葉をよく耳にするようになったが、この住み慣れた地域で住民同士が支え合い、地域ごとの課題を解決する仕組みをつくり、率先して取り組んできたのは葛飾区の社会福祉協議会だと思っている。そして、この小地域福祉活動という活動は下町ならでは人情味あふれる寅さんの街、葛飾区にとってとてもマッチする活動であり、第4次葛飾区地域福祉活動計画の基本方針の重点として盛り込まれていることを確認し安心した。ボランティアの代表として微力ながら、私もこの活動に携わりたいと思っている。」

委員

2点申し上げたい。1点は小地域福祉活動について、社協は今までやってきた中でどのように評価しているのか。準備は大変で中身は1時間半から2時間で終わる。参加する方は100名いる。私の地区には1万1千世帯がいる。その50何%が町会員だから5千数百人はいる。それが100人集まったらすごいという話になって、それはおかしいのではないかと。もっと違ったかたちでやることができないのか。だけど、年数が経つにつれて100人も集まってくれればいいのかとなってきた。それと同時にテーマをどうするか。うちでは統一的なものを何年も続けよう。1つは運動、それから認知症防止、奥戸のスポーツセンターを使って動き回る。200名入るところで100名だから、もう少しキャパシティはある。けども、奥戸地区ですら自転車で来るのが大変という人がいる。年齢が60歳以上の人はバスで来るしかない、自転車では危ないと子どもたちに言われてしまう。ほかに200人を収容する場所はないということになると、どこが地区でやった場合の成功点なのだろうか。年に2回、5月と11月にやっていて2月頃から既に準備に入らないと間に合わない。そのときに町会の決算とかと重なるのでしっちゃんかめっちゃんになる。

そういう状況で、社協としてどこが到達点なのか。地域で見ろというのだったら、地域にはそれだけの人口がいるわけで、その中でそういう仕組みをつくっていくというのは容易なことではない。10名とか20名だということ喜んでいてはいけない。サロンの場合はそれでいいかもしれないが、地区の小地域福祉活動となると、責任者とすればそれではいけないのではないかと。今期はコロナの影響があったが、小地域福祉活動の推進委員会を設けて中身も含めて今年、そして来年はどうするのかという会議を設定した。

2つ目は募金活動。自治町会と民生さんを中心に全部組み立てた。今、日赤の集金をやっている。町会の中の1地区だけで100人近くを集金して回る。これは婦人部とか女性部の皆さんがやってくれている。これが何とかならないか。日赤の問題、それから歳末助け合い、やることはいいし、行けばくれる。でも、行くのが大変だ。それを何とかしてくれないだろうか。委員からも話があったように、年寄りになってきているので回る人がますます減ってくる。町会役員になってくれと言って、集金を中心ではな

いかと言われたときに抗弁ができない。4月になったらこれ、5月になったらこれ、10月になったら赤い羽根、12月になったら歳末助け合い、1年中じゃないかと言われた場合に私はどうやって返事をしたらいいのだろうか。町会の役員の中身よりも集金の話で終わってしまうのがしんどいので、何か方法がないのか。旧態依然とした方法でいいのだろうか。

委員長

ほかにご意見がなければ、これで本日の地域福祉活動策定委員会は終了したい。

(2) その他

事務局より、パブリックコメントの実施、次回策定委員会について説明があった。

4. 閉会

(以上)